

鍋奉行は  
妖狐の銀さん



著 ひーらぎ  
絵 杜崎ヨノモ

# 鍋奉行は妖狐の銀さん

文:ひーらぎ/表紙:杜崎ヨノモ

# キャラクター紹介

大坪縁（おおつぼ ゆかり）男 二十歳

高校卒業と共に田舎から出てきたはいいが、大学受験に失敗したせいで現在浪人生活中……とは名ばかりの優柔不断なフリーター。マスドネルドきつね街駅前店バイトマネージャー。

銀（ぎん）女 外見年齢二十六程度

きつね街で祀られている狐の神様。

何より食べることが好きで、小さな食のこだわりが自分の中にある。  
赤い和服に銀色の髪、女性なら誰もが羨むグラマーボディの持ち主。

櫛川千波（くしかわ ちなみ）女 十六歳

マスドネルドきつね街駅前店でバイトをしている高校一年生。  
ちつちやくておつちよこちよいでバイト先のマスコット的女の子。

いつもミスしてばかりで助けてもらっている縁に想いを寄せていくが、果たして彼女の恋が実る日は来るのか！？

実家は伏見銀条神社。

大貫和人（おおぬき かずと）男 二十歳

マスドネルドきつね街駅前店で働く大学生でバイトマネージャー。

金髪、無精ひげ、気怠げな顔と怖がられる要素の塊だが根は眞面目で不器用な男。  
タバコは赤マルボロ派。ビールはアサヒスーパーードライ。

# プロローグ　【冬のはじめ】

大坪縁が神様と暮らし始めて二週間が過ぎようとしていた。

「銀さん、もうご飯できるから食器運んどいてー」  
縁がコンロ上の土鍋へ意識を向けたまま、リビング兼寝室へ声を投げた。しかし返つて来たのはバラエティ番組の大げさな笑い声だけ。

いや、よく聞くとその隙間から、

「了解じゃ……。じやけど、あと五分だけ待つてはくれぬか……」

睡魔へ飲み変えの艶っぽい声がした。使うところを間違わなければどんな男も一声で魅了できそうなのに、なんともつたいないことか。きっと、宝の持ち腐れとはこのことを言うのだろう。

「銀さん?」

一向にやつて来ない彼女へ溜息し、縁が両手で土鍋を持ちながらリビングへ入った。ベッドとコタツ、テレビとほとんど無駄な家具がない一室は隙間風入り放題なボロアパートに相応しい光景だった——コタツ布団から覗く、銀河へ雪を流したような色の髪と、灰が少しだけ混ざった獸耳を除けば……。

「五分もあれば、おれひとりで準備終わっちゃうって。ほら、起きてつてば」

「土鍋をテーブルへ置いてからコタツ布団を持ち上げると、  
『よいではないか……少しくらい』

## 鍋奉行は妖狐の銀さん

髪色同様に白い肌へ乗つた、充血やカラーコンタクトじや表せないであろうナチュラルな赤目と交差した。腕へ引っ掛けるように和服を着ているせいか、胸とかオペライとか谷間のほくろとか、色々丸見えになつていてる。だが、もうすっかり慣れた日常の光景。そして彼女もまた見られているからといって恥ずかしがるようなこともせず、「少しくらいよいではないか……。わしは神様じやぞ？　すごいんじやぞ？　偉いんじやぞ？」お主よりずっとずっと歳上なんじやぞ……？」

「そもそも、銀が縁へ背中を向けるように寝返りを打つた。

「じやあ銀さんは夜ご飯なしつてことでいい感じかな」

呆れて溜息しか出てこず、縁がそつとコタツ布団から手を放した途端、

「……仕方あるまい。食器じやな、少し待つておれ」

かなりゆっくりな動きで銀がコタツから出てきた。盛大に乱れて肌色大露出な和服を直そうともせず、これではただの事後にしか見えない——なんて口が裂けても言えず、

「よろしく、銀さん」

喉の奥で言葉を止めたまま苦笑を向ける。

「わしは神様じやぞ……神に食器を運ばせるとは最近の人間は罰当たりじやのお……まあよい。神は無礼な民にも寛容でないと務まらぬからな」

ブツブツ、キツチンから独り言が聞こえてきた。しかし言葉と裏腹に、和服のお尻部分からはみ出た、書き初め用の筆をずっと太くした灰色の毛の塊、しつぽが右へ左へゆらゆら動いている。

犬は楽しい時に尻尾を左右に振り回すが、狐の彼女も同じなのだろうか？

## 鍋奉行は妖狐の銀さん

縁はそんなことを頭の片隅で考えながら、ふと窓の外へ目を投げた。今にも雪が降りそ  
うな紺碧の空はある日から引っ張つてきたみたいだ。

「そりや銀さんがコタツに潜るわけだよなあ……」

あの日、そう――銀さんと出会ったあの夜もこんな寒い日だった。

## 1食目

# 【冬、二十歳フリーター。妖狐さんと出会う】 「雪も溶かすミルフィーユ鍋」

1

毎年冬になると、人に化けた狐が人里に下りてくる。そして、春になるまで人として暮らし、無事山へ帰れた年は作物の豊作が期待できる。

この街に暮らしている人間なら何度も聞いたことがある狐の伝説だ。

もちろん、実際誰かが、

「狐に化けた人間を見た！」

なんて話があるわけでもなく——というか、この街やその周辺で狐を見ること自体かなり珍しいのだとか。

所詮は伝説、言わなければ思い出すこともない。それがこの街で暮らす人間の大半が思っていることなのだろう。  
無論、大坪縁だってそうだ。

忘れられた伝説——一週間後に十二月を控える今日この日までは。

ただ毎日が同じ日常の繰り返しだった。

## 鍋奉行は妖狐の銀さん

春も夏も秋も冬も——朝起きてバイトに行く。帰つたら一人で食事を作つて一人で食べて、一人で片づけて。

なんでもいい、きっと刺激、新しい日常の何かを求めていたのだろう。  
仮面浪人という罪悪感さえ忘れられるなにかを……。

「……生き倒れつてこの時代にあるんだ」

バイト先から自転車で十五分。駅前の雑踏が、夢か何かと思えるほどの静かな住宅地。木造平屋や古い建物が、最近の民家、コンビニと不器用に肩を並べる中に縁が暮らすおんぼろアパート『銀色荘』はある。そして、その一階一番手前101号室が縁の部屋だ。

この街に引っ越してもう三年になろうとしているが、女性の知り合いはバイト先の人間のみ。そして年齢は高校生が大半であり、何かの勧誘以外で女性がこの部屋に訪ねたことは一度もない——無論、和服の似合う銀髪美人もだ。

では、玄関扉へ寄り掛かつたりしたこの女性は……？

「だ、誰……てか、い、生きてる……よね？」

髪は丁度夜空の頂上で輝く月明かりみたいな銀色。誰も足を踏み入れていらない雪原のような健康的に白い肌は『純白』という言葉が怖いほど綺麗に当てはまつていた。

「ん……」

彼女の口元から絞り出したような吐息が聞こえ、縁がそつと顔を覆つっていた銀髪を耳へ流してみる。眉間に深いシワが寄つており、目尻が小刻みに震えていた。

「だ、大丈夫……？」

## 鍋奉行は妖狐の銀さん

男なら誰もが目を奪われる胸元と一緒に和服から大きく露出された肩は声を上げそうなるほど冷え切っていた。とても人の肌を触つてるとは思えない。もう氷と同じだ。

「いつから居たんだろ……。涙……？」

泣いていないとわかつているのに、縁は指先は彼女の目の下を指で確かめていた。そして縁の手へ呼応するように、

「んっ……」

色素を失った唇から細い吐息がもう一つ漏れた。

「お、おーい、だ、大丈夫ですかー？」

縁が何度も女性の身体を揺さぶると、

「ん……」

目を覚ましたのか、への字に結ばれていた彼女の唇がゆっくり持ち上がった。何かを訴

えようとパクパク動き。

「……か……つた」

吐息の奥で何か言葉のようなものが聞こえた。

「だ、大丈夫！？ え、えっと救急車呼ぶから待つてて」

慌ててダウンジャケットを彼女へかけて、ポケットから携帯を手に取る。

「……へつ……のじや」

もう一度、切れ切れの声が後ろからした。振り返ると、

「え、えつ！？ あ、あの！？」

## 鍋奉行は妖狐の銀さん

咄嗟の出来ごとに番号を打ち込んでいた携帯が足元へ転がった。ずつしり、彼女のボリューミーな胸がすぐ眼下へ迫っていたのだ。

「な、なにしてるの……？」

胸だけじゃない、首元あたりへ現実感のない銀髪がある。ずっと閉ざされていた瞼が持ち上がり、薄紅色の瞳がなにかを訴えかけようと縁へ向いていた。

「お腹……減ったの……じや……」

まさかこんな女性がそんな……お腹空いたって理由で倒れてるわけないよね。

寒さと現実感のない光景で耳がやらのれたに違いない、そうだ。そうに決まっている。縁がなんとか自分を納得させようと精一杯の言い訳を心へ塗り重ねていると、

「お主……なにか食べ物を恵んでくれぬか……。礼ならする」

……どうやら聞き間違いじやなかつたようです。

縁はゆっくり女性を身体から引き剥がして、  
「と、とりあえず……うち入る？」

ドアノブを掴み、女性へ限りなく苦笑に近い笑みを向けてみた。間もなくして、銀髪の女性が控えめにこくりと頷いた。

「……きて、どうしてこうなつたんだ」

## 鍋奉行は妖狐の銀さん

縁は冷蔵庫から取り出した野菜をまな板脇へ並べてから自室を振り返った。引き戸の磨ガラスへは赤い和服がぼやけて映つていて。テレビでも見てくれると気が紛れるのだが、聞こえてくるのは立て付けの悪い窓から吹き抜ける隙間風のみ。

「ど、どうしよう。え、えっと……き、嫌いなものとかないよね。というか、なにか出前とか頼むべきなのかな……ど、どうしよう」

二分の一サイズの白菜へ包丁を立てたはいいが、思うように力が入つてくれない。始めて自分の部屋に友達が遊びに来たのとは少し違う、ワクワク感と異様な緊張感は相手が女性だからだろうか？  
それとも……。

「もしかして……今日おれは……」

ゴクリ、生温かい唾液が喉を抜けていった。

「札はするつて言つてたし……ま、まさか、な」

もしそんな輝かしい未来が待つているなら、やっぱりこんな部屋に居させていいわけがない。今すぐ駅前のそれっぽいホテルに向かつたほうが——縁が半ば暴走寸前の脳みそをフル回転させていると、

「クシユツ」

鼻を啜る音が聞こえた。

「……何考えてるんだおれは『包丁を持っていない手で頭をかき混ぜる。

## 鍋奉行は妖狐の銀さん

こんな寒い日にあんな格好で生き倒れてたなんて、よほどのことがない限りありえることではない。このご時勢、犯罪だつてありえるのだ。  
なのにおれは自分のことしか考えないで――。

「あ、あの、寒い？」

少し大きめの声で銀色の彼女へ呼びかける。少し鼻を啜る音がしたと思えば、  
「心配無用じや。わしなら平気じや」

「寒かつたら暖房入れるから言つてね。この部屋ボロいからコタツだけだと寒いんだよ。  
遠慮しなくていいからさ」

あはは、少しでも笑わせたくて大げさに言つてみる。しかし彼女の声は深い雪中へ埋もれたように聞こえてきてくれない。聞こえるのは自分でもいつから動かしているかわからぬ包丁の音。そして時折する名前も知らぬ彼女のくしやみ。

「……すまぬな。お主はわしとは何も関係ないのに」

白菜を一口サイズより少し大きめにカットし終えた頃、その声はやつてきた。  
縁は一度浮かんできた言葉を飲み込んで包丁を置いた。

「よかつたらなんだけど」

リビングの隅っこにあるダンボールからみかんを幾つか取り出してテーブルへ並べた。

膝を立てて座っていた女性が不思議そうに赤目を見開いて疑問に揺れる。

「ご飯、もう少しかかりそうだからよかつたら食べててよ。あとやつぱり寒いから暖房入  
れるね」

## 鍋奉行は妖狐の銀さん

続いてエアコンのリモコンを操作、暖房を起動。じわじわ温かい空気がカーテンのよう  
にリビングへゆらゆら広がっていく。

「……すまぬな」

「おれも寒かつたからさ」

彼女の正面、テレビを後ろにして縁が炬燵へ足を入れた。靴下じや防ぎきれなかつた冷  
気がじんわり解けていく。

「名前聞いてなかつたよね。おれは大坪縁」

「名前……か。わしの……名前は」

一度タメを作るよう口を閉ざした女性が目元へかかつっていた銀髪を右へ流した。  
「銀」

簡潔にそれだけが発せられる。真夏の夜に響く風鈴のような声色に思わず聞き入つてしまい、

「どうかしたか？」

「あ、いや……銀」

思わず反応するのが少し遅れてしまった。

「銀さんって呼んでいい？」

「好きに呼ぶといい。わしは……縁、と呼ばせてもらう」

「いいよ。それで銀さん」

「なんじや？」

## 鍋奉行は妖狐の銀さん

そうやつて持ち上がつた紅の瞳と交差し、縁は一瞬ではあるが自分の意識が彼女のの中へ吸い込まれそうな気になつてしまふ。慌てて咳払いで目線を逸らしたのを誤魔化し、玄関の方をチラ見する。

「どうしてあんな格好で外にいたの……？」もしかしてだけど「

「そうじやなあ。お主が何を考えているかくらいわしにも想像できる」「じや、じやあ……」

自分の脳裏に浮かんでいたのが的中したショックに縁の目がこたつ布団へ下りた。しかしやつて来たのは、

「心配無用じや」

みかんの皮を剥ぐ音と一緒にした溜息混じりの笑い声だつた。

「お主の考へていることは何も起きておらぬ」

「……ほんとうに？」

「うむ。ただ……ここから先は少し説明が難しくてな」

小粒のみかんを口へ放り込んでから、エアコンの風に揺れる螢光灯の紐を見上げ——テブルのみかんが無くなつた頃、銀の目線が戻つて來た。

「縁は……幽霊は信じるか？」

唐突な質問に、縁が片目を引き攣らせた。

「否定はしないかな」

「宇宙人は？」

「いてもおかしくないよね」

「では、どうじやの。ツチノコはいると思うか？」

「ツ、ツチノコ？」

「カツパは？」

「か、カツパ……？」

「ネツシーは？」

「ね、ネツシー？　え、えつと……」

何が言いたいんだ？

その後も都市伝説に登場する何かしらの名前が続くが、一向に銀が言おうとしていることの意味が一つとして理解できなかつた。次第にネタも尽きたらしく、

「お主、中々見所のある人間じやの」

「褒められるのかな……？」それで、銀さんは……

人間なんですか？

なんて疑問がどうして自分の中へ浮かんできたのだろうか？

縁は自分のしようとした質問に自分で首を傾げてから、改めて銀へ目をやつた。正面の彼女は疑う余地もない、正真正銘人間だというのに……。

「な、なんじや急に……？」

無意識に低くなつた声に怯えさせてしまつたらしい。少し後ろへ下がつた銀が両腕で胸を隠すように身体を抱いた。

「あつ、いや……その。変なこと聞くけど、銀さんって――」

## 鍋奉行は妖狐の銀さん

我慢できずに失礼極まりない質問が唇へ触れた瞬間、俯き氣味にこちらを見上げていた銀が頬を薄紅色に染めた。そしてそこから聞こえてきたのは、凜とした佇まい、現実感がない「幻想」のような彼女からは想像もつかない可愛らしいお腹の音。

「す、すまぬ……。えつとなんじやつたか？」

ううん、縁が空咳で誤魔化して腰を上げた。

「ご飯食べてからにしよつか。あの箱にみかん入ってるから食べて待つてですか！」

「す、すまぬ……お主はいいやつじやの」

「普通は見ず知らずの相手にここまで親切はせぬぞ？　ま、まさか……わしの身体目当てか！？」

再び後ろへ飛び跳ねて、今度は背中を向けられてしまう。縁が慌てて声を荒げる。

「ち、違うよ！！」

いや、一度はそんなドリームを胸に抱いたけども！！

「おれの家の前で倒れてたんだ。運命って言つたら変だけど、そんな気がしたから」  
氣恥かしさで小さくなつた縁の声へ、銀がくすりと口辺を緩ませた。

「……不思議な考え方をするな、お主は」

「褒め言葉として受け取つておくよ」

そう縁がキツチンへ戻る。が、すぐに顔だけをリビングへ覗かせて、  
「あの……今更で悪いんだけど、シャワー浴びる？」  
「……よいのか？」

## 鍋奉行は妖狐の銀さん

「その格好じや嫌でしょ？ 汚れてるし……」

「そこまでしてもらわなくてよいのじやが……そうじやの腕を広げて自分の身体を確認した銀が、

「借りてもよいか……？」

「うん、お風呂はそこの扉ね。トイレはその隣ね」

玄関のそばにある二つ並びのドアを指差した。

「すまぬ。なんじや……ここまで親切にしてもらったのじや……」

風呂場の引き戸を手にした銀が足を止めた。既に夕食の準備に戻ろうとしていた縁が包丁を片手に彼女の背中へ目を見る。

「銀さん……？」

「い、いや……なんでもないぞ。ありがとう、と言いたかっただけじや」

言つた銀が逃げるよう風呂場へ入つていった。

彼女の思いつめたような声とその意味が気になつたが、和服の衣擦れやシャワー音に縁の意識はものの見事に攫われてしまう。精一杯の抵抗として、まな板の脇へ並べた具材に包丁を入れようとしたのだが、

「……ほ、本当に勧めちやつたけど、変なことしてないよね。だ、大丈夫……昨日風呂掃除したし、汚くないはず。で、でも……いや、でもつてなんだよ！」

湯気の奥の楽園を想像してしまい、ちつとも手が動いてくれない。

「いや、落ち着けよ。銀さんは……お客さんだし。とにかく今は料理だろ料理！！ そういうことは料理ができたら考えろって！」

## 鍋奉行は妖狐の銀さん

煩惱を振り払うように、豚バラへ無駄に力の籠つた包丁が下りた。ほぼ一口サイズに切り揃えたら下準備は完了だ。というか、もう七割近く完成した状態と言つてもいい。二口コンロの一つを塞ぐ一人暮らしを使うには大きめの土鍋へ、先に切つていた白菜、と豚肉をミルフィーユ状に内側からぐるりと並べて、具材の三分の一ほどが浸かるまで水を投入。そこへダシ用に昆布を浮かべて、沸騰するまでそのまま放置、準備オツケー。つまりやることがなくなつてしまつた、ということだ。

「いや、いやいや。ダメだって、銀さんはお客様なんだから。で、でも……」いつの間にか風呂の扉へ向いていた視線を慌てて鍋へ戻す。ゆらゆら踊るコンロの炎で見ていれば心も落ち着くはずだ。

だが、友達以外、それも女性が自分の家の風呂を使うのは初めてのこと。そして彼女なんていた経験すらない自分には……。

すぐ扉を開ければ、服からはみ出していた色んなものがフルオープンでシャワーに打たれているわけだ。鼻歌なんか歌つちやつて……。

無意識に喉が震える。自分の内側にある緊張に身体が熱くなる。

「き、着替え！ そう、着替えがないとダメだよね。銀さんの服汚れてたし！！」

明白すぎる言い訳を口に、リビングのタンスへ走つた。

「な、何なら平気かな……」

彼女のあのたわわな胸が収まる服なんて……。

あの飛び込みとなるたわわな胸でも着れる服なんて……。

破壊力抜群のたわわなおっぱいが一番強調される服なんて……。

## 鍋奉行は妖狐の銀さん

徐々に服探しの理由が変わっていることに気づかぬまま、縁が手にしたものは、「こ、これだ！」

窓際でハンガーに揺られていたもの。

そう、白ワイシャツ。

選ばれたのは白ワイシャツでした！

「だ、だつて前空いてる方が収まるとか気にしなくていいし……？」定番、お約束は守ら

ないとだよね、うん」

だつてそこにワイシャツがあったのだから。無ければ他の選択をしたのだ。

なんて言い訳を自分の中で繰り返しながら縁が風呂場の扉をノック。

「ぎ、銀さんっ……！」

『なんじや？』

シャワーの音が止まり、水を蹴るような音と一緒に籠もり気味な声が返ってきた。それだけで余計緊張感が高まり声が裏返ってしまう。

「あ、あの着替え……持つてきたから。入つて平氣？」

『すまぬのお。少し待つてくれぬか』

それからしばらくして、

「縁、着替えのことじやがの。お」

扉が横にスライドしたのだが、

「あ、あれ……？」

「……やはりわしはこの服の方が落ち着くと思うのじやが……よいか？」

## 鍋奉行は妖狐の銀さん

「い、いや……」

縁は片手にあつたワイシャツを背中へ隠した。バスタオルで髪を拭う銀が着ているのは先程と全く同じ赤い着物だ。しかも何故か汚れが綺麗になくなっているじやないか。

「き、着替えは？」

「これか？ 下着は無理じやつたが、着物の方は何とかなつてな」

「あ、あの……着替えあるけど？」

「わしはこの方が落ち着くのじや」

「ならいいんだけど……」

髪を伝つた零が大きく開かれた谷間へ吸い込まれ、つい目がいつてしまふ。慌てて別の

方向へ視線を逃がしたのだが、

「縁……どうかしたか？」

「い、いや……」

だが、抵抗虚しく縁の視線は光に吸い寄せられる虫のように、用もなく銀の方を見てしまう。悲しい男の性、宿命、運命だ。

色っぽく火照った肌がそうさせるのか、形と一緒に柔らかさまでがわかつてしまふ大露出の中、ちらりと薄ピンクの突起がひとつ、ふたつ。

まさか……！？

「ぎ、銀さん……下着、は……」

「ん？ 洗濯に出したぞ」「せ、洗濯……！？」

## 鍋奉行は妖狐の銀さん

「汚れておったからの……まづかつたか？」

きよどんと首を傾げる銀へ縁が口辺を引き攣らせた。

つまり彼女は完全ノーガード状態というわけだ。

腕へ掛かる着物を引っ張り下ろせば、男なら誰もが一生のうち一度は憧れ、夢見る地上最高の場所。桃源郷が待つてになることになる。

「縁？」

「えつ、ああ、ご、ごめん。いや、いいんだ……銀さんがいいなら」

むしろウェルカムですから！！

縁が内心ガツツポーズしていると、

「そうではない」

ツンツンとつつかれ、

「あれのことじや」

銀の指差す方へ首を回してみると——グツグツ鍋が泡を吹いた。急いでコンロの火を切り、ふきんを手に土鍋の蓋を持ち上げてみる。

ふわっとよく煮込まれた白菜の甘い香りが漂ってきた。豚肉にもきちんと火が通つており、透明のだし汁へキラキラの肉汁が染み出ている。そこへ、醤油、塩、チユーブ生姜で味を整えて完成だ。

「できたのか？」

「お待たせ、ご飯にしようか」「うむ、待つておつたぞ！」

「やはりお主は変わつておるの」

「そうかな？」

豚肉と白菜を適当によそつた器を両手で受け取つた銀に口元だけで苦笑を作る。「いただきます」、両手を合わせた銀が箸を右手にした。箸の間でとろける白菜が口へ運ばれる。身内にも振舞つたことがない手料理に緊張する中、銀は感想を口にしないで、更に何口か箸を進めてみせた。

「ど、どう？ 鍋だから失敗とかないと思うけど」

そう聞かずにはいられない、なんとも不思議な沈黙だった。

そうじやのお、グラスのお茶へ口をつけた銀が器の上へ箸を並べた。緊張感を思わせる彼女の空気感に縁の身体が強ばつた。  
〔縁……お主中々やるのお〕

「ほ、ほんと？」

一重気味の両目を緩ませた顔に縁が安堵の息を漏らす。

うむ、そう頷いた銀が再び白菜を口へ運んだ。  
「箸で触つただけで染み出る薄味のダシが素材本来の味を引き出し……舌の上でしつとりとろけていく。かと思えば、これは豚肉じやな」  
白菜を飲み込んで間もない口へ吸い込まれていく。

## 鍋奉行は妖狐の銀さん

「噛めば噛むほどダシと生姜の香りがふわっと広がって……。肉の力強い食感も相まって飲み込むのが惜しいほどじや」

「そ、そこまで言われるとは思つてなかつたけど……ん、薄味？」  
ほぼ万点であろう感想に頬を緩ませたが、一つ引っかかることが。しかし縁がそれを指摘するよりも早く、

「お主の家も前で倒れて正解だつたかもしけぬな」

冗談っぽい笑い声がやつてくる。鍋の熱気に当てられたのか、彼女の頬は雪原に桜の花びらを散らしたように薄色が乗っていた。

「銀さん暑い？」

「ん、そうじやの。身体の中からポカポカして……とてもよい感じじや。この鍋も味がしつこくないからいくらでも食べられてしまうぞ」

「ああ、よかつたらなんだけど……」

縁は少し言いにくそうに、彼女の前へポン酢とごまダレのボトルを並べた。不思議そうにそれらを見ていた銀が、

「なんじやこれは？」

始めてな子供顔で首を斜めにされる。

「ポン酢だけど……えつ、知らない？」

まさかそんなことつて……。

服装といふ話し方といふ、かなり古風な感じではあるが、だからといって現代に生きる上でかなりメジヤーな調味料を知らないなんてこと……ありえるのか？

## 鍋奉行は妖狐の銀さん

「こんなものがあつたとはな。うむ、試してみようかの」「う、うん。少し酸っぱいから気を付けて」

嘘とも思えないし……ポン酢も知らないって銀さん、本当にどこから来たんだ？」縁が顎へ手を当てて深く考え込みそうになつていると、

「ほお、これが……。香りは中々じやな」

銀の方から柑橘類の中でレモンと肩を並べる清涼感、柚子の香りがやつてきた。意識を引き戻された縁が顔を上げると、

「ポン酢と申したか。いざ……！」

薄黒く染まつた白菜が銀の口へ吸い込まれていくところだった。

そして、

「わしの人生とは……なんじやつたのかのぉ」

喉を揺らした銀の口からふわりと白い吐息が登つた。満足げに細められた瞳からは想像もできない小さな声の直後、「こやつの存在を知らずに鍋を食べていたわしが恥ずかしいわ。白菜の甘さを引き締める酸味と……これはレモン？ 違うの、柚子か？ ダシの風味と重なつて口へ広がる様は芸術じや」

「そ、そう……なの？」

「生姜の香りと喧嘩せず見事に溶け合つておる。お主が勧めるのも納得じや」「ゴマも試すよね。ならこれ使って」「すまぬな」

## 鍋奉行は妖狐の銀さん

さて、縁から新しい器を受け取つた銀。興味深く容器を見つめながら「ごまダレを注ぎ、なるほど。甘塩っぱい香りがなんとも……ゴマのほのかな香りもまたいい感じじや。トロツとしてるのも食材に絡んで」

「ごまダレをくぐらせた白菜をお口に I N。しばらく無言の咀嚼が続き、立て続けに今度は豚肉にタレを絡めて口へ運んだ。なるほど、銀の口角がゆつたり持ち上がる。「鍋料理、ここまで奥が深いものとは思わなかつたぞ。ポン酢とごまダレ、まさかこの二つが料理を劇的に変えてくれるとは……恐れ入つた！」

「大げさじやないかな」

「そんなことはないぞ」

「興奮気味な銀が自分の前へポン酢とごまダレの容器を並べ、

「野菜を中心に食べるならばポン酢じや。野菜本来の甘みを程よい酸味が引き立てておるからのお。ツンと爽やかに鼻を抜けていく様はそよ風じや。しかしごまダレ、此奴も中々の仕事人じや」

ごまダレのキヤップへ白い指が這い、花を愛でるような艶かしい動きで底の方までしつとり撫で上げる。こつん、悪戯な彼女の指がごまダレのキヤップをつついた。

「此奴は肉を食す時に真価が發揮されるものじや。濃厚な甘みとゴマの風味は肉の臭さを消し、野性的な食感、肉感だけを残すように絡んできおる」

お茶で口を濯いだ銀が、ふうと吐息する。それまで正座を崩した、いわゆる女の子座りだったが、気が抜けたのか足が伸びてきた。縁の脛辺りをちょこんと触れた素足の感触がなくなつた頃、

## 鍋奉行は妖狐の銀さん

「お主、独り身なのか？」

「えつ、な、なに急に！？」

「こんなに料理がうまいのじや、恋仲のものくらいおるじやろ？」

「……いたらいいんだけどね」

縁がささくれた溜息と共に窓ガラスへ視線を逃がした。

「今の今まで恋人とかいたことないよ。それがどうかした？」

「うむ……慣れてくれる、と思つたからのお」

「慣れてる……？」

「見ず知らずのものを家へ上げたり、夕食を共にしたり……普通は家にも上げぬぞ？」

銀が身体を支えるよう、後ろへ手をついて座り直した。

「まあ普通は警察とか呼ぶだらうけど。なんでだらうね」

よくわからないや、縁が不気味用に目元だけで笑つて箸を手にし直した。

丁度よく火が通つて確かな重みを持つた豚肉をゴマだれで頂く。淡白な肉の食感を楽しんでいるうちに、胃袋までを芳ばしいゴマの香りが一息で駆け抜けていく。ビールで流し込みたい衝動に駆られるが、今は客人の前だ。自分へ強く言い聞かせて、同じ麦でも全く味が違うものを一口。

「こっちこそ、もつといい物を出せればよかつたんだけど……」

「わしはこれで満足じや。お主の手料理ならなんでも美味しいじやろうからな」

空になつた銀の器へ新たに具材をよそつてやる。汗も拭わず箸を動かす姿をぼんやり眺めていると、

## 鍋奉行は妖狐の銀さん

「ん、わしの顔に何か付いておるか？」

「えつ？」

「ニヤニヤと……なんじや、言うてみよ」

「いや、なんでもないんだ。ごめん」

自分の部屋で友達でも身内でもない、完全な他人が当たり前に夜ご飯を食べている。その事実がくすぐったくて、心の奥が雲に乗ったようにふわふわして、ただ楽しい——なんて思うのはきっと変なことなのだろう。

きっと銀の言っていることは正しいのかもしれない。

縁はふと彼女の言葉を思い出してくすりと口元を綻ばせた。

「まだおかわりあるから沢山食べてよ」

「悪いの。縁の料理は美味しいからつい箸が進んでしまうわ」

「一人暮らしだからね。自炊しないと食費が大変なことになるし」

「わしが世話になつた者共は——いや、なんでもない。忘れてくれ」  
何か言いかけた銀へ縁の箸が魔法にかかつたように動きを止めた。

「銀さん？」

呼びかけにも応じずに、俯いた銀色の横顔。あれだけ楽しそうだった箸が今は悲しそうに白菜へ触れたままだ。

「……お主の目的はなのじや？」

唐突にやつてきた言葉の意味がわからず、縁は次ぐ予定だつた言葉を詰まらせた。  
「も、目的……？」 目的って？』

## 鍋奉行は妖狐の銀さん

「わしを……わしを助けた目的じや」

「そ、そんな……」

縁が動搖を隠しきれない息遣いで、彼女の顔を覗き込んだ。綺麗に見開かれていた赤い

双眸は銀色の闇に飲み込まれて隙間も見えてくれない。

「答えてくれぬか……？」縁、お主のような善意の塊のような人間がいることはわかつて

おる。だが、わしの前に現れるなぞ……そんな都合よく物事が進むとは思えぬのじや」

湖の表面を覆う氷の膜へヒビが入ったような声がやつてきた。

「別に目的なんて何もないよ」

「本当か……？」

「うん。ただ……」

「ただ、なんじや？」

「えつと……」

こういうの、なんて言葉にすればいいのかな……。

視界の端へ銀を捉えたまま、器へ目を下ろす。モヤモヤというより脇腹をくすぐられて  
いるような、なのに嫌じやない感覚の正体を知りたくて、そつと目を閉じてみる。

カチコチ時計の音とエアコンの無機質に温風を吐き出す音が続き、

「質問に答えてくれぬか。わしはお主を信用したいのじや」

鍋へ手をつけることなく、こちらをじつと見据えていた。

「えつと……」

## 鍋奉行は妖狐の銀さん

ただ直視されているだけなのに、赤い瞳から彼女のの中にある自分の知らない不安や恐怖が伝わってくるようだつた。嘘も冗談も誤魔化しも許されない——真実だけしか口にできない瞬間。縁はその緊張感に唾を飲み込んだ。

「本当に理由なんてないよ」

「嘘じや」

「嘘じやない。たまたまおれの家の前に倒れてたから。それだけ」

「嘘じや」

「どうして嘘だつてわかるのさ」

「そんなの……」

——嘘以外あるわけなかろう。

銀の声があまりにも小さくて、本当にそう言つたかは縁にもわからなかつた。ただ、彼

女の唇が僅かにそう音を立てた気がしたのだ。

「なんで銀さんがおれの家の前に倒れてたとか、過去に何があつたとかわからないけど、

おれは嘘をついているように見える？」

「……わしにはどれも同じ人間にしか見えぬ」

いつだつてそうじや——。

銀はそう口にした。まるで自分が人間じやないような——とても寂しげな声。

エアコンがついているはずなのに、縁の背筋は吹雪に晒されたように凍えていた。なの

に握り拳には汗が滲んでいた。

「……どういうこと？」

## 鍋奉行は妖狐の銀さん

「全て話そう。それを知つてなお、わしを信じさせることができるか見ものじや」カラカラ挑発めいた笑みの銀。しかしその自嘲とも取れる笑顔の中で瞬間に覗かせた「孤独」を縁は見逃さなかつた。

座りを正し、

「いいよ、信じさせる。」

「よからう」

お茶で唇を濡らした銀がゆっくり言葉を紡ぎ始めた。

3

「わしの生まれた山奥はな、冬になると食べ物が何もなくなるのじや。ちよいとした事情で離れることもできぬ、もう何年も山で暮らしておつた。そして冬になると、食べ物を求めてここに下りてくるのじや」

銀が一息にそう切り出す。

「山奥……？」

「この街から見える山があるじやろ、わしの家はそこにある。冬の間だけわしは他の人間に食べ物を分けてもらつておるのじや」毎年冬になると食べ物を求めて人里へ下りてくる——どこかで聞いた気がしないでもない話だつた。

## 鍋奉行は妖狐の銀さん

縁が握り拳を顎へ当てて、頭の片隅から該当しそうなエピソードを検索してみる。しかしマイマイチうまくヒットしてくれない。

「……毎回食べ物を与えてくれる人間は見つかる。中には冬の間、寝床も提供してくれる人間も中にはおつてな

ここまででは銀の警戒心を深くさせた出来事があるとは思えない。しかし裏腹に、縁の胸に妙なざわつきが広がりだし、ノイズみたいな音が鼓膜付近を刺激していた。

「そ、それで……」

「うむ……世の中ギブアンドテイクというもののじや。金も何もないわしができることといえば……」

当時を思い出しているのか、銀の眉間に険しくシワが刻まれた。  
綺麗だった赤目は怒りに燃えるように見えて、ただただ怖い。が、その怒りも長いこと続かず、次第に瞼が降りていき、静かな恐怖として縁の背筋を震わせた。

「わしに差し出せるものは……自身しかなかつた、というわけじや」

話の結末を足底でごみを踏み潰すかのように吐き捨てた。

「わしにはお主もある者たちと同じにしか見えぬのじや……。すまぬ……」

「ふざけてなどない。」

わしは冬の間生きていける、あの者たちは自分の欲を吐き出せた。

「お互い様ではないか」

「そうじやない……そうじやないよ」

声の震えを抑えて、そう口にするのが精一杯だった。

## 鍋奉行は妖狐の銀さん

縁のしやくり声に銀が顔を上げかけた。縁と目があつた途端、何かを言おうとしていていた唇が音もなく閉じてしまう。逆に縁は言いたいことは沢山あるのに喉元で留まる空気の塊で何も言えないでいた。

「お主は……お主はなぜ泣くのじや」

乾いた笑い声に縁が大きく咳き込んで立ち上がった。

「約束する、おれは銀さんに何もしないから」

「どうしてわしじやなくてお主が泣くのじや」

「う、うるさい。いいだろ、別に」

服の袖で涙を拭う。

「とにかく、おれは銀さんにそんな酷い事とかしないから。おれだけは何があつても銀さんに酷いことはしない。そんなの……人として間違つてるから」

「人として、か……ではそうじやの」

残りのお茶を飲み終わつた銀がゆっくりこたつから立ち上がつた。

こたつが暑かつたのか、少しさはだけてしまつとり吸い付きそうな太ももがチラリと着物の丈から覗いていた。シワの寄つた生地を払つて直すや、  
「わしが人じやなかつたら……話は変わるものではないか？」

「人じやない……？」

「一体何を言つてるんだ？」

「そうじや、見ておれ」

こちらを見据える赤い両目がより鮮明に、より濃く色を持つたかと思えば次の瞬間、

## 鍋奉行は妖狐の銀さん

「縁、わしはお主を信じたいぞ」

「縋るような声が隙間風とは違う、どこからか吹き出した嵐のような防風に隠された。  
「うつ、なにこれ」

急な風に腕を目元まで持ち上げてやり過ごす。しかし、あまりの強風に目を開けることが難しく、何が起きているのか把握することはできなかつた。

「これがわじじや」

直後、ドロンと白い煙が銀の立つっていた場所へ巻き上がって、

「ぎ、銀さん……？」

そこにはつい先程まで一緒に鍋をつづいていた赤い着物の女性、銀は跡形もなくなつていた。代わりに

「これでもわしが人間と言えるか？」

髪だけだと思っていた銀色が全身を覆つた獸が四足で立つていた。細長く尖つた顔はどう頑張っても人と呼ぶことはできない。犬や猫ともまた違つた独特なフォルム、それぞれ個別で動く九本の尾に耳。

例えるならそう、

「き、狐……」

尻尾の数、毛の色を無視した上で一番近い生き物はまさに狐た。

「え、えつと……えつ、えつ……？」

たつた今起きたことの処理が追いつかず、縁は何度も目を瞬かせた。何かの手品とも思えないし、

## 鍋奉行は妖狐の銀さん

「縁？」

こうしてこの狐から銀の声だつて聞こえてくる。

「あ、あの……銀さん、なんだよね？」

「うむ、ちゃんと見ていたじやろ」

「見てたけど……でも、えつ……あ、あの」

「お主もこの街に暮らしておるのじや。一度はこの街の伝説は聞いたことあるじやろ」

動搖でわたわた喘いでいた縁へ銀の微妙に冷めた目が向いた。動物園で見るものより随分生き生きした感じに、縁の思考が水を浴びたように冷静になつていく。

「この街の伝説……？」

「きつね伝説——わしは昔からこの街で祀られているきつねの神じや」

「狐の……か、神？　か、神様ってこと？」

「こくん、ふわつふわの銀毛を揺らして頷いたかと思えば、

「まあ人間界ではこっちの格好でいることが多いがのお」

ドロン、再び煙が上がり——今度は狐がいなくなり、和服の胸元を直す銀が現れる。しかし、先程の狐が確かに『居た』と主張するよう銀と色がグラデーションになつた狐耳とふさふさのしつぽが一本炬燵布団へ乗つていた。

もうますますパニックである。

「ど、どういうこと……？　えつ、ど、ドツキリ？」

確かに ore の家の前で倒れてるあたりから嘘みたいなノリではあつたけど……  
銀さんが神様？　もしかして化かされてるの？　狐だけに。

## 鍋奉行は妖狐の銀さん

やはり彼女の言葉がうまく自分の中へ馴染んでくれず、縁は這うようにフローリングを歩いて、

「なんじや？」

「ちよつと現実とは思えなくて……」

恐る恐る指先でふよふよ左右へ動くしつぽをついてみる。たんぽぽの綿毛へ触れたような感触が指に優しい。つい面白くて、銀の？ しつぽを指で遊んでしまう。

「んつ……」

温っぽい吐息と共に尻尾が縁から逃げていった。それを追いかけて、今度は膝の上へ乗せてブラッシングのように指を通してみる。

「すごい……もふもふ。えつ、なにこれ……すごいんだけど」

「じゃ、じゃから……縁よ」

片手の指を口元へ運んで、声を抑えようと目を閉じる銀。よく見ると白い頬が熱っぽく桜色に染まっているじゃないか。

「……お主わかつてやつておるのか？ それとも無知なだけなのか？」

「わかつて……えつ、無知？」

首を捻りながら、今度は両手にその尻尾を抱いてみる。羽毛を直に触るとこんな感触なのだろうか？ 文字通り羽みたいな軽さなのに、しつかり彼女の体温が伝わってくる。心地よさに目を閉じたら眠つてしまいそうだ。

試しに頬擦りしてみると、  
「んんっ」

## 鍋奉行は妖狐の銀さん

銀の背中が伸び上がった。同時に意志を持つたように尻尾も固さを帶びて、一本一本の毛が刺のようになに縁の頬へ突き刺さる。しかし、撫で続けると元の柔らかさへ戻り、「ゆ、縁、い、いい加減にッ……！」

足を震わせて膝をついた銀が上品さの欠片もない顔でこちらを睨みつけた。よく見ると両目も涙へ濡れ、少し前までシリアルスマードを語っていた瞳とは思えない。「は、恥を知れ、このド変態が！」

くるりと翻した尻尾で縁の頬をビンタ。

「尻尾を無闇やたらと触るではない！お主は出会って間もない女の身体を愛撫する趣味があつたのか……お、お主だって同じではないか！」

尖った双眸がキツく吊り上がったのを見て、縁はその場へ正座した。じつとフローリングを見つめるが、

「なにが信用させてみせるじや、お主も同じじや」

鼻で一蹴した銀へ縁が両目を固く閉じる。

「ごめん……」

「謝つて済むものか。わしが人間じやないと分かつたらこれじや」

「ほお？」

何もかも諦め、全てを遠ざけて拒絶とするような赤目は下衆を見下すそれと同じ気がした。今にも目を逸らしてしまいたい緊張感に口の中が干上がっていく。

咳き込みそうな渴きを押し殺して、

## 鍋奉行は妖狐の銀さん

「耳が生えてるとか、尻尾があるとか……確かに興味本位で触りはしたけど、だからって拒絶したり遠ざけたり、何してもいいとか思つてないよ。おれと少しだけ外見が違うだけの人間だよ、銀さんは」

「言うのお。ではどう潔白を証明する？　お主があの者たちと違うとどう説明する？」

「……そ、それは」

口壁を噛みながら縁が再び俯いた。

銀が縁へ距離を取るように立ち上がり、

「……言えぬか。なら、わしは去るのみじや、夕飯、助かつたぞ」

それだけ言い残した銀髪が明かりの灯つていないキツチンへ消えていった。草履を履く音が聞こえる。間もなく蝶番が縁と銀に再開を知らぬ別れを知らせるのだろう。

しかし、

「待つてよ」

「それじやダメだ……ここで引き止めないと多分後悔する。ずっと、ずっと。

縁が慌てて立ち上がった。和服の袖を掴み、

「証明になるかはわからないけど……」

「なんじや、もうよいだろ」

「それじや……おれがよくない。やつと……誰かと」

ずっと胸のあたりに感じていたこそばゆさの原因がわかつたのだ。  
嫌悪感を顕にする銀の両肩を掴んでこちらを向かせ、

「おれはただ誰かと一緒にご飯を食べたかつただけなんだよ」

## 鍋奉行は妖狐の銀さん

「嘘をつくならもう少しマシなもの付くべきじや」「この部屋に引っ越してから……今まで自分の料理を食べてくれる人なんていなかつたら。いつもこの部屋にはおれしかいなくて」

——空っぽだった。

この街に来て三年。その間ずっと感じていた物足りなさ。  
きっとそれは自分が浪人生と名乗つていながら予備校にも通わず、ただバイトしてその日を怠惰に生きている罪悪感からくるもの、そう勝手に思つていた。  
「銀さんのこと何も知らないし、神様って言われてもイマイチ信じられないけど……後悔はしたくない。だから……」  
でもはつきりわかったのだ。

「お主は本当に変わつておるな」

縁の頬を銀の微笑が撫でた。

「いや、ただのお人好しというやつかもしれぬな。お主はわしに欲情せぬのか?」

「しないよ」

「お、お主なあ……。一応わしは女ぞ?」

どうも微妙な表情をされ、縁が難しく首を捻る。

しばらく目が合つたのかと思えば、

「まあよい。神に向かつて欲情なぞ、罰当たりにもほどがあるからな」  
困り顔の銀が溜息した。

## 鍋奉行は妖狐の銀さん

「わしと飯が食べたかつたから助けた……なんともおかしな男じや。もう少し賢く生きれば良いものを……しかし縁、お主を信じよう。そこで一つ頼みがあるのじやが……」「うん、おれもなんだよ」

にこり、口辺をそう結んだ銀がこちらへ身体を回した。そして、

「冬の間、おれと一緒にご飯を食べててくれない?」

「冬の間、わしにお主の料理を食べさせてくれぬか?」

二人の声が重なった。

それは、永遠に忘れることができない冬が雪もなく始まりを告げた瞬間だった。  
人と神、決して交わることのない者同士のたつた数ヶ月の奇妙な関係が――。

鍋奉行は妖狐の銀さん

『鍋奉行は妖狐の銀さん』は C91 冬コミで販売！

『よろづ屋本舗』

C91 コミックマーケット

2日目 12/30(金) 西1ホール の - 08a

ひーらぎ著作の C90 既刊も販売予定！

※新刊をお買い上げの方に豪華特典の妖狐の銀さん  
鍋敷きが付属！既刊と同時購入で割引もあります！

# 鍋奉行は妖狐の銀さん

発行者 よろづ屋本舗

<http://yorodukatudousi.dou-jin.com>  
yoroduyahonpo@gmail.com

著者名 ひーらぎ (@rag0311)

<https://twitter.com/rag0311>

イラスト 杜崎ヨノモ

編集 黒ねこ作 (@gretelproject)  
<https://twitter.com/gretelproject>

これはサンプルです。完全版ではありません。

本書の著作権は著者にあり、著者に無断で本書の内容の一部または全部を無断で複写(コピー)することを禁止します。

また、この作品はフィクションであり、実在する個人、団体とは一切関係ありません。